

母子家庭の表象

——江藤淳『成熟と喪失』からの地平——

発表者：篠山昂平 Shinoyama Kohei

コメンテーター：石川巧(立教大学教授[文学部文科学科日本文学専修])

司会：福嶋亮大

本論で扱う高井有一と津島佑子の著作からの引用箇所についてはその頁数を記し、末尾にその引用出典を記す。

はじめに

今までに「母子家庭」が1つのジャンルとして、文芸の中に位置付けられたことはあっただろうか。日本の文芸は「家族」という大きな主題でありとあらゆる家族を包摂してきた。本論の試みはそこから「母子家庭」を独立させて読むことにある。

そもそも「母子家庭」を包摂する「家族」自体、戦後に近代からの転換を迫られていた。それを文芸批評によって指摘したのが江藤淳である。江藤は『成熟と喪失』で「第三の新人」たちの作品を論じて、近代日本は母子密着の社会であったが、戦後のアメリカとの関係の中で「真の近代化」を達成するために、近代的な母子密着を解体し男子は「成熟」しなければならないと主張した。この「母子密着の解体」は女性の「自己崩壊」と同義である。それは、「近代」が女性に植え付けた「家」から離れ「出発したい」という願望を実現させるために、女性は自らの手で内なる「母」を崩壊させなければならないためである。江藤がエディプス的な論理で示した男子の「成熟」の裏には女性の「母」からの「解放」と「自己崩壊」の問題があった。

上野千鶴子はこの評論を「涙なしには読めませんでした¹⁾」と絶賛したが、しかし一方で70年代以降の日本が「成熟」の課題をどこか

に吹き飛ばしてしまったと指摘する²。「自己崩壊」の問題を抱えた女性の息子や娘の世代はもう「成熟」自体を問題にしていないというのである。その原因について加藤典洋『アメリカの影』を参照して、「高度成長」によって「近代」が達成すべきゴールではなくなり、また女性を抑圧するものでもなくなったためであると論じている。上野は「息子と娘の世代」の例に田中康夫と山田詠美を挙げていた。

このように「家族」に変化が起きている中で「母子家庭」は一体どのように表象されてきたのだろうか。父親のいない家庭では自然と母子は密着するはずであり、また母親は父親の役割を担わなければならないはずである。さらに、戦後すぐの戦争未亡人によって成立した母子家庭と離婚によって成立した母子家庭では家庭像や母子の様子が異なるだろう。その時、一連の「成熟」にまつわる問題はどこまで母子家庭に当てはまるのだろうか。

本論では母子家庭の表象を江藤が指摘した女性の「自己崩壊」の問題から考えていきたい。女性の「母」からの「解放」と「自己崩壊」が依然として問題である時、母子家庭の母親はどのように表象されているのだろうか。戦争体験の有無という基準で高井有一『北の河』と津島佑子『黙市』を取り上げ、その比較・分析を行う。

1. 高井有一『北の河』

高井有一『北の河』は、空襲で都会の家を焼かれた母親と15歳の息子が父方の遠縁を頼って東北へ疎開し、そこで母が自死を遂げたことを、35歳になった息子が回想する物語である。この物語は高橋昌夫が指摘するように一部脚色されている部分はある³が、概ね高井の体験に基づいている。

先行研究には母親の自死の原因を「疎開」や「東北の冬」、「母親が疎開先での生活に馴染めないこと」に求めるものがある⁴が、本論は母子が疎開する原因となった「都会の家」の焼失という事件を重視する。

母親は「都会の家」の精神性が疎開先の生活に必要なだという。母親が求めるものはむしろこの1点のみである。そのため疎開先の住人に紹介された、「その気になれば、充分それで生活を立てていけ

る」ほど給料の良い進駐軍との通訳の仕事も断ってしまう。

「(前略) 私たちだけで、何も無い所で、寒さに閉じ籠められてしまうのよ。それも今年の冬ばかりじゃなく、ずっと続いて行くのよ。そんなこと、想像もつきはしないわ」(高井: 36)

母親は「昔に近いような生活」以外を思い浮かべることが出来ない。しかしなぜ、母親はこれまでと同じような生活をそれほどまでに求めたか。それは「昔に近いような生活」が、「都会の家」での「母」の役割のままの生活を指しているからである、と論者は考える。言い換えればそれは、母親が生活の中に「父」を求めているということである。そのために母親は実の父親に同居することを提案するが、あえなく拒否されてしまう。

母親がそれでも「父」を求める時、取り得る手段は1つしか残されていない。

父の七七日の法要を終えた翌日、母は父の名の表札を剥ぎ取って、新しく掛け替えた。新しい表札に記されていたのは私の名であった。無器用に釘を打ちながら母は言った。「貴方は子供だけでも、戸主だからこうして置きましょう。女名前の表札を出すのはいやなのよ。周りから何か弱いものに見られそうな気がして」/思えば、母の変化はこの頃から始まっていたかも知れない。父の死後、母は私に殊更厳しく叱言を言う事も多かった。(高井: 28)

昔に近いような生活の中で「母」の役割を望む母親が取り得る最後の手段は、息子を「父」にすることである。これが達成されれば、母親は「父」の不在を解決できるだけでなく、息子を育てる「母」としての役割を生きることが出来る。しかし「私」はこの企みに協力しようとしな

「もういやになってしまったの。本当にいや。疲れてしまったのよ。特に貴方と暮すのにね。これから先どんなことがあっても、此処がどんなに住みよくなつて、周りの人がどんなに親

切だって、もういや。貴方と二人だけで顔を突き合せて暮して、一切合財を頼られ切って、それ以外に何も無い生活、こんな生活がこれ以上続けて行かれるとでも思っているの。よかったら、貴方一人で続けなさい。そう、それで自分でいろいろと知るといいわ。そうすれば、今みたいに独りで倅せそうにしているのが、どんなに間違いか判る筈よ」(高井: 37)

物語の終盤に現れるこの母親の言葉は、「父」になろうとしない「私」に対する非難に満ちている。「此処がどんなに住みよかつたって、周りの人がどんなに親切だって」という母親の仮定からは、問題が「都会の家」を失ったという喪失感や「冬」に対する恐怖ではないことがわかる。このとき母親が問題にしているのは「息子」が「父」になる予兆を見せないことなのである。

この言葉の直後、母親は自死を仄めかし、「私」は初めて恐怖を覚える。しかしその恐怖の対象は「死」ではなく「愛されるのに馴れた私の立っている場所」が失われることであった。その「場所」はすなわち「息子」という役割である。父親の死が感情に迫ってこないのは、「私」を愛してくれる母親がいるからであり、母親がいる限り、「私」は「息子」でいられるためである。母の自死はこの3日後であった。

この母親は再婚によって「父」を迎え入れればその不在を埋められたはずである。それをしなかったのは母親が「都会の家」での「母」の役割のままの生活に拘っていたからである。

母は戦争によって断絶してしまったものを、出来るだけそのままの形で回復しようと試みていたのではないだろうか。仮に外部から新たに「父」を迎え入れることは出来ても、それは「都会の家」での「母」の役割のままの生活とは異質なものである。そう考えた母親に残された最後の手段が「私」を「父」にすることであった。

しかし母親は「私」を「父」に出来なかった。その時、母親は全ての選択肢を失っただけでなく、「母」からも疎外されてしまう。母親は「母」の役割すらも失ってしまうのである。それこそが母親を自死へと導いたのではないかと論者は考える。これは江藤が論じた『抱擁家族』の時子の死とはまるで反対である。時子は「母」からの解放を望んだことで自己崩壊してしまったが、『北の河』の母親は

「母」であり続けることを望んでいた。しかし結果的には、それによって自己崩壊してしまったのである。

2. 津島佑子『黙市』

高井を含む「内向の世代」の次に現れるのが、戦後生まれの作家たちである。1947年生まれ、津島佑子は父・太宰治を1歳で亡くし、以後母のみの家庭に育った。津島自身も1972年に結婚・出産を経験するが1976年に婚外子を出産して離婚し母子家庭の母親となっていて、津島の初期の作品はこのような自らの体験の要素が絡み合ったものが多い。

津島は戦争に対して「自分が関与したくてもできない時代のこと」という「冷淡」な態度を取り、「自分の国の平和な状態しか知らずに育ってきている」ことを「私自身の時代背景」であると捉えている⁵。つまり、津島は戦争から切り離された母子家庭の最初期に育った作家であると同時に、自身が経験する離婚と母子家庭は津島自身が「選択」したものである。一方で、津島の母親が夫・太宰治を失うのは母親による選択ではない。このため、津島がこの2つの世代の母子家庭を描く際には、母子家庭を「選択」している/していないということの差異が現れてくる。

1982年に『海』に発表された『黙市』はまさにその異なる2つの母子家庭を描いている。この作品には「六義園のそばに、私の母が三人の子どもたちを連れて越してきたのは、ちょうど二十五年前、末の子どもである私が十歳のときだった」「私のすぐ上の兄が呆気なく肺炎で死んだ。その四月に、姉は大学に入った」などの描写があり、これらは津島の実生活を反映している。そのためここでの母に対する「私」の態度と、子どもたちに対する「母」としての「私」の態度を、そのまま執筆当時の津島自身の態度であると読むことも出来るだろう。

「私」は25年前に住んでいた六義園のそばに2人の子どもと引っ越したことで母親と暮らしていた時代を回想する。「私」が赤ん坊の頃に夫に死なれた母親は、兄が死んでから「来る日来る日を通夜のように過ごし」ていた。姉が家を出た後は「私」と母親の2人暮

らしとなる。13歳の「私」は家庭内に欠落している「父」を求めて異性の高校生・大学生と交流する。しかし彼らに「私」が求めているものは「持ち合わせがな」かった。

母親と「私」は、それまで飼っていた老犬の死をきっかけに仔犬を飼い始めるが、その犬は成長しても「仔犬のままのふるまい」をする「役立たず」な犬であった。愛想を尽かした母親は犬を「殺すこともできたのに、六義園のレンガ塀の下まで犬を連れて行き、抱き上げ、塀の向こう側に放り投げ」てしまう。母親は家庭に「父」を補うことを諦めているのである。

それから「私」は家を出るまで、「見棄てられた犬の領分」である六義園に背を向けて過ごしていた。しかし母子家庭の母親となった「私」は六義園の近くに戻ってくる。そこは「見棄てられた犬の領分」、言い換えれば「母が見棄てた父の領分」である。

母子家庭の母親である「私」には「父親」が必要であった。それは「私」が「それだけは嫌だと思い続けていた」「自分の子どもたちに男親というものを味わわせてやることのできない母親」になってしまったからである。この時「私」は自分と母親を重ねている。

タイトルになっている「黙市」は「沈黙交易」のことを指す⁶。他方が交易の場に物品を置き、また他方がその対価と考えられる物品を置く。先に物品を置いた側がその対価に満足し持ち帰ることで初めて成立するという交易の形態である。戻ってきた六義園には猫が増えており、そのそばの家ではベランダに猫の好きなものを置いておけば猫が通うようになるになっていた。そこで「私」は猫に食べ物を与える代わりに猫は対価として子供の父親を務めることを思いつく。「私」は喋らない猫との間のこの交易によって「父親」を補完しようとするのである。ただ「私」は「人間の」父親を諦めたわけではない。

子どもたち、特に下の子どもにとっては、写真だけの、動かず、しゃべりもしない人間の影にすぎなかった。下の子どもが三歳、四歳、と大きくなるにつれて、そう気がつかずにはいられなくなった。それでは父親と死別した私と同じことになってしまうのではないか。死んだのなら仕方がない。しかし生きているのなら、体が動き、目玉が動き、口が動いて、声が出る人間

の姿を、父親の記憶として残しておいてやりたかった。(津島: 167-168)

「私」が「人間の」父親を求めるのは「私」のためではなく、2人の子供のためである。夫と死別した母とは違い、自身の選択によって母子家庭となった「私」は、2人の子供が「私」のように「男親というものを味わわ」なかった人間にならないようにするために、「人間の」父親を求めるのである。ここでは「私」は過去の自分と自分の子供を重ねている。

しかしいざ父親に会うと、「私」は子どもたちの父親と何も話すことが出来ない。むしろ子どもたちの様子を話してしまったら、父親に「見守って欲しい」と望むことになってしまう。父親は話さないがそれはまた同じ理由である。この点において2人は「黙」である。しかしこの父親との「交易」は成功しない。見守らない父親にとって、「私」の子どもはもはや他人の子どもであり、それに望む対価などないためである。

それでも「私」はこの「黙」を肯定する。

沈黙が必要なのだ。沈黙を続ければ、互いの領分を犯すことなく、いつでも取引を再開できる状態を保っていることができる。(中略) たとえば私や、母、そして子どもたちにも、森のそばに住んでいることは気休めになる。森にさまざまものを捨て、でも捨てたのではない、別の世界に放してやったのだと思い、自分の知らない森の姿を想像し、こわがり、なつかしがっている。(津島: 170)

「私」は母子家庭の母親であるが、もはや父親は家庭に常時いなければならぬものではない。重要なのは「互いの領分を犯すことなく」いることである。すでに母子家庭を「選択」した「私」は、「母」でいるために「父」を必要としない存在である。

「私」は自分の子どもたちが「父親と死別した私と同じことになってしまう」ことを危惧して父親に引き合わせるが、そこでは父親に「見守ること」すらも要求しない。自分から完全に独立した別の世界として「父親」があり、必要が生じた時に「互いの領分を犯すこ

となく」取引が出来れば良いと考える。「私」は母親とは違って、家庭内に「父」を補完しようとしないのである。

3. 「家庭」から解放される母

戦争体験の有無による母子家庭の違いは、母子家庭を「選択」したか否かによる違いであると置き換えることが出来る。『北の河』や『黙市』の「選択」できなかった母親は欠落した「父」を家庭内に補完しようとしたが、自ら母子家庭を「選択」した『黙市』の「私」は家庭内に「父」を補完しようとしなかった。この時、女性の「母」からの「解放」と「自己崩壊」は既に問題ではなくなっている。それは「母が家庭から解放されている」ためである。

江藤は「成熟」を問題にすると、「母と父が揃っていること」を家庭の前提にしている。実際に『北の河』と『黙市』のそれぞれの母親は家庭から失われた「父」を補おうとしていた。一方で『黙市』の「私」は「母と父が揃っている」という江藤の「家庭」の前提から解放されているが、それは「私」が母子家庭という形態を自ら「選択」したためである。「高度成長」はこの「選択」ができるということの経済的な要因としてあるに過ぎないのではないだろうか。

4. 終わりに

本論では時間の都合上、男子の「成熟」の問題について言及することができなかった。「息子」から「父」になろうとしなかった『北の河』の「私」はどうなったのか、あるいは『黙市』の「私」と同世代の母子家庭で育った男子の場合はどうなるか、などである。それだけでなく、母子家庭の母親が再婚して継父を迎え入れるケースや、地方と都市などの生活環境による差異など、母子家庭の表象には「成熟」の問題を離れたところにも検討すべき点が多くあると思われる。母子家庭はこれまで社会福祉学や心理学といった分野から研究されることの多いテーマであったが、本論の視座が今後、文学でのより活発な研究を導く一助となれば幸いである。

[注]

- 1 上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子『男流文学論』筑摩書房、1992年、218頁。
- 2 上野千鶴子『『成熟と喪失』から三十年』『成熟と喪失——“母”の崩壊』講談社、1993年、280頁。
- 3 高井有一『夢の碑・真実の学校』（新潮社、1981年）収録の解説より。1933年生まれの高井は終戦時13歳であるが、『北の河』では15歳の少年にされている。また「年譜」によると高井には妹がいたが、『北の河』では兄弟がいないという設定になっている。
- 4 小林八重子『『北の河』からの歲月』『民主文学』481号、2005年、118-127頁/平瀬誠一「近現代文学探訪〈78〉——高井有一『北の河』』『民主文学』514号、2008年、152-157頁など。
- 5 津島佑子『薄暗い背景』『文学界』30巻9号、1976年、160-162頁。
- 6 島尾敏雄・津島佑子「受賞の言葉（第十回川端康成文学賞発表）』『新潮』80巻9号、1983年、181頁。

[引用出典]

高井有一『北の河』文藝春秋、1976年。
津島佑子『黙市』新潮社、1990年。

[参考文献]

上野千鶴子『『成熟と喪失』から三十年』『成熟と喪失——“母”の崩壊』講談社、1993年。
加藤典洋『アメリカの影』河出書房新社、1985年。
上田三四二「死と夢のあいだ——高井有一論』『新潮』75巻6号、1978年、213-220頁。
古谷健三『「内向の世代」論』慶應義塾出版会、1998年。
庄司肇『津島佑子』沖積社、2003年。

質疑

福嶋 指導教員として少し補足をすると、もともと篠山さんは父子家庭について研究をしたということだったのが、それに該当する作品が少ないということで、母子家庭の文学的な表象を研究することになったわけです。父子家庭を題材とした作品が少ないことはもちろんそれ自体考えないといけない問題ですが、そういう背景があってこの二つの作品が選ばれています。

もうひとつ補足しておく、江藤淳が『成熟と喪失』という非常に有名な評論を出したのが1967年ですが、それと相前後して高井

有一が『北の河』を書いていて、そこでもやはり母の問題が出てくる。『成熟と喪失』ではこの作品には論及されませんが、大体同世代である高井と江藤が、同じような時期に母について書いていたというところを出発点としつつ、津島佑子まで考察の線を延ばしていくというのが骨子だったと思います。

本日は日本文学専攻の石川巧先生にお越しいただきましたので、コメントを願えますでしょうか。

石川 私は日本近代文学が専門ですので比較文明学という観点から適切なアドバイスができるか自信はないのですが、文学研究の立場からお話をさせていただければと思います。

まず出発点として、江藤淳の『成熟と喪失』の議論を上野千鶴子が「絶賛した」と書いていることに違和感がありました。私自身はあの「解説」をととても冷たく突き放した言葉だと思っています。上野千鶴子が言っているのは、60年代の文学における状況というのは大の男たちがみんな揃いも揃って〈母〉なるものの幻想を求め、そこに成熟の糧を期待しているような状況であり、そうした幻想に縋りついてしまう男たちのいじましさを涙なしでは読めなかったということだと思います。それはけっして褒めているわけではないと思います。上野千鶴子は、その後ジェンダーの問題において江藤淳的な認識、すなわち男は喪失を知ることによって成熟しなければならないと考えるようなマッチョ的な認識をことごとく潰していくわけですからね。

江藤淳は『成熟と喪失』の後、米国に渡ってプランゲ文庫や公文書館の戦後占領期資料を調査し、いわば戦争で負けたお父さんたちがどのようにして去勢されていったかを研究するわけですが、そうした問題も含めて上野千鶴子が江藤淳をどのように評価しているのかという点については慎重な議論が必要だと思いました。『成熟と喪失』の中で議論されているのは1960年代の小島信夫や安岡章太郎といった第三の新人たちですが、基本的に江藤淳が問題にしているのは、戦前の家制度や封建的な社会が崩壊し、〈父〉なるものが不在となってしまった状況のなかで代理の〈父〉を期待される〈私〉の戸惑いなのだと思います。

それから、本日の発表では高井有一を取りあげていますが、『北の河』を『成熟と喪失』の問題から読み解こうとすることにも留保が

必要だと思いました。ご発表のなかでも指摘されていますが、『北の河』は主人公がかつての自分を相対化できる地平に立ったところから回想される物語なわけですから、この点に関しての分析がもっと必要なのではないのでしょうか。35歳の主人公が過去を回想することの意味を篠山さんがどのように考えていらっしゃるかをぜひ伺いたいです。

もうひとつ、今回のご発表で論じている津島佑子の『黙市』については、売り手が置いた物を書いてが他の物と交換するかたちで引き取っていく黙市の構造に関する分析が興味深かったです。黙市で交換されるものは何と何なのか？ 黙市という仕組みを取り入れることで何を表現しようとしているのかという問題は、この作品を読むうえで最も重要なところなのではないかと思います。

ただ、ここで本質的な質問なのですが、篠山さんはなぜこの二つの作品を選び、並べて論じようとしたのでしょうか？ 二つの「母子家庭」（ここではレジュメの表記に従って「母子家庭」という言葉を使います）が時代も状況もまったく異なっているわけですが、この二つの作品を並列させて議論を展開することでそこから何を抽出しようとしているのかが問われることになると思います。また「母子家庭」を問題にするとすると、それは親の問題なのか、それとも子どもの問題なのかということも出てくると思います。シングルマザーの問題を描いている側面もありますし、そこで育った子どもの認識を考えることもできると思うのですが、篠山さんはどちらに焦点をあてたいのでしょうか？ あるいは両方に焦点をあてたいのでしょうか？ そのあたりをぜひ詳しく教えていただければと思います。

身もふたもないことを言うのですが、〈父〉や〈母〉というキーワードそのものになんともいえない違和感を覚えました。本日のご発表を聴いていますと、なんというか〈父〉の不在が家庭を崩壊させるというか、〈父〉がいれば何かいろいろなことが解決できたのに…という結論になってしまいそうで釈然としないものがあります。それはある意味で、お父さんとお母さんがいる家庭は普通の家庭で、どちらかが欠けている家庭はその欠けているものを求めてしまうのだという議論になってしまわないのでしょうか。たとえ文学作品の分析といえども、私などはそのような議論に心がざわつきますし、ある意味でとても恐ろしい考え方なのではないのでしょうか。私たちの

社会にはいろいろな家庭があるわけで、それぞれが様々な困難を抱えていると思います。今回の二作品を通してそうしたデリケートな問題に迫ろうというのはやや無謀なのではないでしょうか。

それから、「母子家庭」という表現はある意味で厚生労働省的なお役人言葉だと思います。行政からの支援や補助を行うために定義されるひとつの基準というか枠組みのようなものだと思います。「母子家庭」といっても内実はいろいろです。この言葉で文学作品を論じようとすると、文学としての微細な表現が捨棄されて厚生労働省的な眼差しというか、福祉の対象とされる家庭という視線が入り込んでしまうように思います。それは危惧すべきことなのではないでしょうか。

本日のご発表を拝聴しての全体的な印象です。津島祐子に関しては、この作家が生涯をかけて書き続けた問題は何だったのかを考える必要があると思いました。最晩年の津島祐子は17世紀を舞台とする『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』に全精力を傾けました。「アイヌ」と日本人の間に生まれた少女を主人公として口承で伝えられる壮大な物語を描きました。混血の少女を通して血と民族と国家の問題に踏み込みました。こうした作品も含めて津島祐子の文学の全体像を眺め渡し、その作家的な営みのなかに『黙市』を置いたとき何が見えてくるかという研究のほうが面白いのではないかと思います。

順序が逆になりますが、もうひとつだけ述べさせていただきます。高井有一の場合は、さきほど申し上げたように回想の物語であることをどのように考えるかということも重要なのですが、もうひとつ考えていただきたいのは母親の自死の原因についてです。篠山さんは私が代理の〈父〉になることを拒んだからだ、という結論を導きだしていますが、私はそれに加えて、高井有一の文学に流れている風土性といいますか、田舎の閉塞的な世界に馴染めない人々、そこからはじき出されていく人々という観点が必要だと思います。私はたまたま秋田の出身なので高井有一の文学は非常に馴染み深いのですが、そういった問題を掘り下げないと『北の河』の「北」というキーワードが不問に付されてしまう気がします。『北の河』には東北の古い因習や風土の中で営みを続けてきた人々の排他性のようなものが流れていると思いますので、そのあたりを含めて議論して

ほしいと思います。

最後の質問になります。本日のご発表では副題に『『成熟と喪失』からの地平』という言葉が使われていますが、この「地平」というのは、ある時代の「地平」を切り開いていくという意味だと理解しました。だとすれば、篠山さんは江藤淳的な問題編成の向こうにどのような展望をお持ちなのでしょうか？ その点を伺えればと思います。また、せっかく上野千鶴子を冒頭で引用しているのですから、「母子家庭」というキーワードあるいは片親しかいない家庭という問題で文学を論じるときに、現代におけるジェンダー論の成果を篠山さんがどのように位置づけていこうとしているのかもお訊きしたいところです。

篠山 ありがとうございます。全てにお答えできるか分からないのですが、まず、上野が江藤淳を絶賛したという点についてです。この引用部分は『男流文学論』という鼎談からの引用ですが、そこで上野は女性にまつわる問題を1965年という段階で男性である江藤が先駆的に指摘していた点を評価していると読んだので、絶賛という言葉を使いました。

それから高井有一の『北の河』についてですが、高井自身がこの作品を書いたのは1965年で、ちょうど戦後20年経ったタイミングでした。高井は「みぞれとさくら」というエッセイの中で、この作品を書くにあたって20年という月日が必要だったと述べています。ここに出てくる「私」は高井自身のことだと理解していますが、この「私」は父にならず、ずっと息子であり続けるわけです。20年という時間を経て息子であった「私」を回想することによって、息子という位置から脱している、それが高井の成熟だったのではないかと考えています。

なぜこの二つの作品なのかについて、最初に考えていたのは、『成熟と喪失』が発表された時点をひとつの起点と考え、1965年以降の作品を選ぶのが妥当ではないかということでした。上野が、成熟を問題にしなかった70年代以降の日本の息子、娘の世代として、1980年にデビューした田中康夫、85年にデビューした山田詠美を挙げていたので、大体65年から80年辺りまでの中から選んだというのが正直なところで、それ以外に何か妥当な理由があるかという、何も言えないところです。

福嶋 石川先生もおっしゃっていた通り、津島佑子にしても『黙市』の後に続く作品があるわけです。そういう大きな流れの中で見たときに、津島佑子のこの作品をどう位置づけるべきか。高井有一の場合も『この国の空』という後の作品で家庭の問題がやはり戦争とリンクして出てくると思うのですが、そういう広がりの中で見ていくことに関してはいかがでしょうか。

篠山 高井に関しては、早くに失った母というものが、それ以降の作品の基調をなしていると考えているので、高井有一論としてひとつにまとめることはしていければと思います。津島に関しては、息子が先に亡くなってしまったことが大きな転換点となり、デビューから初期、中期、それから晩年と大きく変わっていると思うのですが、津島を大きな流れの中で見るというのは言われて初めて気づいた部分ではあります。

福嶋 石川先生がもう一点おっしゃっていたのは、僕も非常に気になったことですが、父をうまく成立させられなかったから家庭が結局うまくいかなかったというような論旨に見えることです。息子を父にできなかったから母が崩壊したというように『北の河』を読んでいたと思うのですが、その読み方でいけるのかどうか、いささか反動的ではないかというのが石川先生の危惧だと思うのですが、どう答えますか。

篠山 例えば、津島が『黙市』において家庭の中に父親を置こうとしていないのは、母親と父親が必要だと津島自身が認識していないからだと思います。高井は世代としても母親と父親の両方が家庭に必要であると考えているのに対して、津島は自分1人で、母親1人と、それから子どもだけで、従来の母親と父親がそろった家庭というものを打ち壊していくような世代の作家であると考えています。

福嶋 しかしそこは説得力がいささか足りないということはあると思うので、今後考えていただいたらと思います。

石川先生から、何か補足でありましたら。

石川 津島佑子の場合には「母子家庭」という問題とともに「異母姉妹の家庭」という問題もありますよね。彼女は大学生のとき異母姉妹である太田治子と会って交流が始まるわけですが、太宰治という著名な作家の父を介してもうひとつの家庭というものが見えてくる関係にあったわけです。しかも、自分の記憶にない父は作品のな

かで自分たち家族を描いていて、文学を通して父という幻想の影を追うこともできてしまいます。つまり、津島佑子にとっての家庭というのは、極めて複雑で多層的なものだと思うのです。さらにいえば、自分自身も離婚によって「母子家庭」を反復するという経験もしています。津島佑子にとっての家族とか家というのは、ひとつの作品を読むだけで論じられるようなものではなく、その作家的な営みを丹念に追うことによってしか見えてこないのではないかという気がします。一方、高井有一の場合は、戦争とか母親の死といった問題を咀嚼し、それを自分のなかで言語化するのに時間をかけなければならなかったこと、長い時間をかけてその意味を考え続けたこと自体が文学表現の原動力になっていると思います。自身の体験を言葉にするのにどれほど大変な労力を必要としたか、時間が必要だったということがむしろ議論の焦点になるのではないのでしょうか。

ということで、二つの作品を無理につなげて論じるよりは、それぞれが違う問題系を引きずっていることを明らかにし、独立したテーマで論じたほうが生産性があるのではないかという気がしました。

福嶋 大変教育的なコメントをいただき本当にありがとうございます。もしフロアのほうで質問などありましたら。

宇野 比較文明学専攻博士後期課程の宇野と申します。母子家庭の表象を、江藤が指摘した女性の自己崩壊の問題から考えていきたいという前提があると思うのですが、篠山さんの中では「母親」という役割の定義は率直にいったどのようなもののでしょうか。例えば『北の河』に登場する「母」の役割がどのようなものなのかを素通りしている形で議論が進んでいる気がしたので、この「母」の役割というものは、具体的に言うとどのようなものなのでしょうか。

篠山 高井自身が息子の側から母親を描いていて、一方で津島は自身も娘であり母親であるというふうになっていて、この二つを並べてしまっている以上、なかなか比較が難しいのですが、私が女性の自己崩壊の問題から考えようとしたのは、母親の問題を考えたいという意味で、母親が、女性なのか、母なのかという2点で揺れているところから、津島のような、それを打ち破って、女性であり、母である存在が出てくると読んでいました。

子どもの側から母親をどう捉えているかということ、私は息子の側

からしか言えないのですが、息子の側から母親というものを考えると、ひとつの回帰する場所としてあるというのが母のイメージであると考えていました。

福嶋 今ふと思い出したのですが、津島佑子はその娘さんも最近作家でデビューしていますよね。また、津島自身にも『光の領分』という家族の小説があり、それが最近、英語圏で翻訳されて評価が高かったりして、いろいろな形で評価の軸ができてつつあります。津島を取り上げるのであれば、さすがにこの作品だけというわけにはいけないと思うので、もっと重層的に見ていくことが必要だと思います。